



機関紙

一水会

No.5
『冬号』

発行日/2015年12月1日

発行人/小川 游

編集責任者/さきやあきら
発行/一水会事務局
〒330-0074

埼玉県さいたま市浦和区
北浦和5-3-3 B-108
山本耕造方

Tel.048(816)8805
http://www.issuikai.org/

題字/有島 生馬

巻頭言

— 第77回展授賞式における代表挨拶より —

今回、初出品の人の受賞が目につきました。とかく「公募展離れ」が言われる昨今、若い人が積極的に出品して受賞し、活気を添えてくれたことは嬉しい限りです。また、今年は一〇八名もの会友推挙がありました。平成元年の大改革後、一水会は、ピラミッド型の安定した組織を作りあげることにも全力を傾けてきました。その形を崩さずに組織を拡大してゆく見通しの中で、思いきって会友を増やすことにしたのです。

その理由の大なるものは、現在、本展で使用している都美術館の展示室を増やして、ロビー階の全展示室を使用させてもらおう…そのためには、組織をボリリュームアップさせる必要が生じてきます。特に役所関係との交渉の場面では、それは非常に重要になってきます。

更にもうひとつ、会にとつて大切なことがあります。展覧会では出品者は皆、当然のことながら賞をめざします。めでたく受賞した人はともかくとして、賞を取りにくい地味な作品でも、永年培ってきた力で、絶対に落ちることはないという仕事のできる人達への処遇についても、真剣に考える時期に来ていると思います。目下、私達は、その具体的な方途を探っているところです。

二〇一五年九月二十三日

小川 游



公募団体ベストセレクション美術2015 2015年5月4日~27日 東京都美術館



4回展を迎え、会期中二四、八八人の入場者で賑わった同展に一水会からは、久保田辰男、佐藤道雄、山本勇、久保慶議の四先生が出品されました。アーティストトークは久保田先生が担当され、初日の午後、二〇〇名を超える聴衆を前に、ユーモアを交えて軽妙に自作を解説されました。



一水会に出品して五十年になります。近年のモチーフがどのような経緯で牛に至ったのかなどについてお話ししたいと思います。

小学校二年生の時、担任の先生に絵をほめられました。特別に先生につくということはありませんでしたが、好きなことなのでずっと続けました。高校では凄いい同級生がおり、後に金沢美大に行きました彼に、デッサンの仕方や絵の描き方を習った事が今日まで続いております。

一水会展には、大学の恩師に勧められて27回展の時に出しました。その頃はずっと老人を描いておりました。中学校、高校で美術教

師をしておりましたがモチーフ選びに苦慮しつつ、今から思えばとんでもない絵を随分描いておりました。

やがて結婚しましてからは息子と娘、それに田舎の母をモデルに描きました。子供達も大きくなった頃、母と牛とを構成して出品したところ暖かく評価して頂きました。母親が他界しましてからは牛がメインになりました。細い線で描いておりますが、近所の牧場に行きました折、毛並が渦を巻いております、これは面白いな!と思つたのが端緒かなと思っております。

アトリエから二十分位離れたところにこの牛がおりますので取材し、草は近くに生えているのを抜いてきて描いています。私の絵のバックボーンは「故郷を描く」ことにあるのかなと思っております。

以上、久保田先生談抜粋 (加曾利光男記)

「特集」第77回 一水会展

展 評



さきやあきら

『今年の一水会展は一段と元気があつていいね』と、初日に何度も聞いた。やはりこれはうれしい。総数六七八点の展示だ。写真という『縛り』があるせいか、この会はほかのいくつかの団体と比べると何となく大人しく、重い感じがすることがある。この会の会展では十日一水五日一石：と対象をもっと丁寧に見るといふのだから、いい加減にすつ飛ばして描くことはできない、少しは仕方がない事かな。しかし、今年はそのようなキオクレも跳ね返してしまいう元気の良さだ。一室に入つて目に飛び込んでくる長坂千恵氏の色彩！ 玉虫良次氏の描く街、川村親光先生の温かさ：しかし一方、どうしても気になることがある。会場に『典型的』といえる作品が少々目立ってきたことだ。昨今のお話題作に惹かれて起る、題材の流行だろうか？ これらの作品のほとんどはしっかりと技術に裏付けられていずれも堂々としたものだが、しかし、一つの会場に『集つて』みると何か違和感がある。本来絵を描くことはとても個人的な理由に裏付けられた行為だから、類似品にはあまり登場してほしくない



visage—貌 さきやあきら

のだ。モチーフの好みは自由だが、ぼくとしてはせめて作者の眼を通して独自の切り口を見せて頂きたいわけで、この点が違和感の正体のような。会場をよく見ると山本耕造氏や中村哲泰氏らの受賞作品のほかに新鮮な切り口の作品は決して少なくない。河石正義氏、加曾利光男氏、芝教純氏、保坂晶氏、久保慶議氏、鍵岡太美子氏、久保多貞夫氏、寺岡克三氏、久保直樹氏：多士済々みな独自の追及ポイントを持っている。来年こそぼくは、『六七八の絵』を愉しみたいと思う。

新 会 員 紹 介

小笠原あい子さん(愛知)



初めて大きく描いたのは生家の仏間の襖。クレヨンで一気に稲妻のように描いた幼い日のらくがきです。それを発見した瞬間の母の声：「なんとまあよく描けたねえ」。その笑顔が忘れられず、今、寝たきりの母を涙溢れるまま描いています。学び多き一水会に、出品できるだけで喜びです。

久保慶議さん(奈良)



この度は会員推挙いただき、本当にありがとうございます。ございませう。京都に生まれ、奈良に住み、身近に取り残された風景をテンペラで描いています。今回は閉ざされた遊園地跡をモチーフにしました。今後も私なりの挑戦を続けていきます。御指導よろしくお願ひします。

芝田順子さん(兵庫)



大阪府河内長野市で無人販売の大きな山に出会って以来、二十年余り大根を描いています。収穫期には丹波の農家を訪ね収穫に参加させてもらっています。新聞で大根の記事を見つけるとすぐ車を走らせませす。地味で小さなテーマですが、会員推挙して頂きましてありがとうございます。ございませう。

綱川サト子さん(栃木)



連作「溪」で、私は岩の持つ力強い生命力、水の持つ柔軟性・透明性をいかに表現し得るかをテーマに、手探りで挑戦して参りました。が、未だに満足のいく「溪」は一枚も描けておりません。これからもいつもの場所立ち、「溪」を描き続けるつもりです。一礼をして。

久世夢二さん(岐阜)



私の油絵入門書は中村善策先生が執筆された『アトリエ』です。それを手に二十有余年、「一水会」会員とは遠いものでした。推挙はまさに夢心地ですが、この「夢の先」を見るには、諸先輩方のご指導と自らの日々努力がすべてと思っております。今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

笹岡義彦さん(高知)



大学より筒井広道先生に師事して来ました。爾後六十年。三十才半ばより制作が中断しました。民間放送に勤務しており二足の草鞋がきびしくなつたためです。十二年前一水会展出品で制作に向かい、やっとこのたび会員に推挙されました。ありがとうございます。

橋本満弘さん(山形)



私が絵を描きたいと思うようになったのは六十年



一水会賞
とどまることのない生命 中村 哲泰



文部科学大臣賞
刻 山本 耕造

受賞のことば

数年前、紀伊国屋書店で森芳雄の「二人」、国立近代美術館で巖光の「自画像」、佐藤忠良の「群馬の人」に出会ったからです。絵を描き続けて、会員に推挙いただけるようになったのは、吉崎道治先生と尺水会の仲間のご指導のおかげです。

藤目 尚江さん (京都)



馬車を描き始め七年です。馬車はそれぞれ構造が違い、関係するものは観察するよう心掛けています。対象物の見えない所や後ろ側を表現出来れば、そして出会った時の感動をどう表せばよいかと、試行錯誤です。今後自分の思いを表現できる絵をめざして精進していきますので、宜しくお願い致します。

本橋 靖夫さん (埼玉)



絵画であれ立体表現であれ具象であれ抽象であれ、心が揺さぶられるような作品に出会うのはすこい。私も死ぬ前に一つでもそんな作品を産み出したい。でも神様はもう私の死ぬ日は決めてあるし、いい絵が出来るかどうかも知っている。『こまった』

文部科学大臣賞

山本 耕造さん (埼玉)



今回は家族の肖像を「刻」というテーマで描きました。机の片隅で何気なく目にした家族写真から、改めて移ろい行く時間を意識したのが制作の動機です。これからも、現在と過去、あの日あの時が渾然一体とした世界。時間を意識した空間を表現したいと思っております。



久保田 辰男 画

一水会 優賞

小沼 秀夫さん (長野)



「目にうつる表面美を追うのではなく、心に響く言葉が描けたら」との思い。何一つ探し当てる事ができぬ迷走の日々でした。名誉ある賞、探

し物のひとつでも見つかればと我が道程振り返る今日この頃。これまでお導きくださった先生方、真に有り難く、肝に銘じ、深く感謝申し上げます。

一水会 優賞

斎藤 由美子さん (埼玉)



青を基調とした絵を描いて二十余年、青は水であり海や空の色、そして生命の色です。これまでの作品の中にも生命を暗示するものを描いて参りました。「私の海」は、自分の人生と重ね合わせました。あまり重くならないように、空間を意識しながら青のイメージをふくらませてみました。

一水会賞

中村 哲泰さん (北海道)



賞をいただき感激しています。作品の原風景は住んでいる近くに森と泉のある原生林。そこは野草の群生地でもあり、春、次々と芽を出し花が咲き、実を結び次の年へと生命は続く。そのエネルギーを心象的に表現できたら。さらには抽象化を、意外性をも：歳のせいか欲張っている自分があります。



一水会優賞
私の海 斎藤 由美子



一水会優賞
知新 小沼 秀夫



東京都知事賞
凱旋門 板倉 慶隆



損保ジャパン日本興亜美術財団賞
原爆ドーム〈再生〉 樋谷 邦夫



浅春風景 川村 親光



ミノスの小径 長坂 千恵



ザルツブルグ初冬 斎藤 政一(遺作)



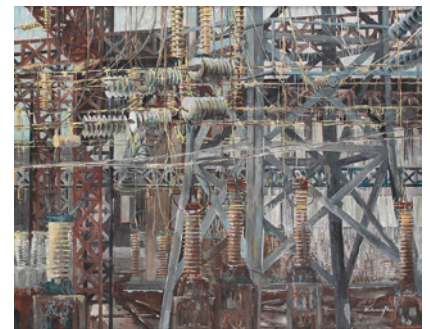
遠景 玉虫 良次



石井柏亭奨励賞
初夏の朝市 山口 順子



安井曾太郎奨励賞
野生のパワー 高橋 よう子



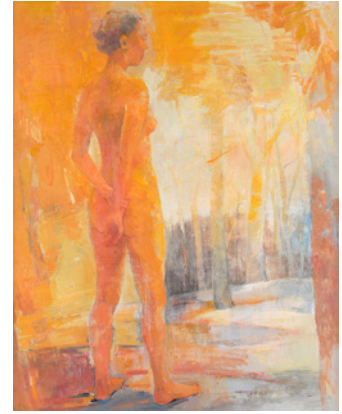
エネルギーシャワー 久保 直樹



木下孝則奨励賞
雪後 飯塚 和秀



有島生馬奨励賞
緑風棚田 増田 敏郎



山下新太郎奨励賞
再びの季節 熊谷 弥生



木下義謙奨励賞
川床 安達 久美子



小山敬三奨励賞
古い、アイロンのある静物 海部 洋



碓伊之助奨励賞
海辺の部屋 大野 文子

入 賞 者

- ◎ 文部科学大臣賞 山本 耕造 刻 知新
- ◎ 水会賞 小沼 秀夫 杉藤由美子 私の海
- ◎ 水会賞 鈴木 喜博 時を刻む
- ◎ 水会賞 土田 佳代子 卓上風景
- ◎ 水会賞 李 哲宏 白と青のまなざし
- ◎ 水会賞 中村 哲泰 ときどきのことのない生命
- ◎ 水会賞 板倉 慶隆 凱旋門
- ◎ 水会賞 樋谷 邦夫 原爆ドーム(再生)
- ◎ 損保ジャパン日本興亜美術財団賞 高橋 よう子 野生のパワー
- ◎ 奨励賞 山口 順生 初夏の朝市
- ◎ 奨励賞 熊谷 弥生 再びの季節
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 緑風棚田
- ◎ 奨励賞 大野 文子 雪後
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 海辺の部屋
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 古い アイロンのある静物
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 冬の公園
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 夏の日
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 温室
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 村の教会(スペイン)
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 時は過ぎ
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 Homage to light
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 想い
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 浜
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 さるぼほに願いを
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 草むらの花
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 雪田の轍
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 向日葵
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 路地の記憶・夏
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 残照の中
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 湖底の宝物
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 ルーアンの教会
- ◎ 奨励賞 飯塚 和秀 収獲のファンファール
- ◎ 会員推奨 小笠原あいつ子 久世 夢二 久保 慶義 笹岡 義彦、芝田 順子、網川サト子
- ◎ 会員推奨 橋本 満弘 藤目 尚江 本橋 靖夫 (以上九名)
- ◎ 会友推奨 青柳由紀子、浅野 和喜、阿萬紀美子、荒谷 幸蔵、伊織 真人、石坂 知子
- ◎ 会友推奨 伊藤 勉 岩田ヒサ子、岩谷 敦子、大場 文雄、岡田 早苗、牛込久美子
- ◎ 会友推奨 宇田 春美、大河原清司、大槻 忠、加藤美津子、金泉 陽子、金子 禮子
- ◎ 会友推奨 小田原光輝、春日 幸子、糟谷 護、草山 育子、黒田 葉子、後藤 邦夫
- ◎ 会友推奨 木原 徳子、木村 純子、清原美根子、坂上 健司、佐藤 一、高橋 巨志
- ◎ 会友推奨 小松みづ子、齋藤 一男、坂井 信行、世名 和夫、篠原 一宏、新酒 玲子
- ◎ 会友推奨 佐竹美笑子、佐藤志ずか、佐野 麗子、竹村 鈴子、立川 由明、田辺 孝一、高橋 巨志
- ◎ 会友推奨 関口 利喜弥、瀬志本みどり、榎名 ツヤ子、世良 ツヤ子、高垣 恵一、高橋 巨志
- ◎ 会友推奨 高橋 進 関口 欣也、竹村 鈴子、寺岡 克三、寺沢 勝義、一宏、高橋 巨志
- ◎ 会友推奨 辻ノ内恵子、坪井 徹 寺井 義夫、立川 由明、田辺 孝一、高橋 巨志
- ◎ 会友推奨 篤田 薫 登内 孝 友杉知恵子、島屋 佳子、中島富久子、東城 庄衛
- ◎ 会友推奨 中本千鶴子、中山 郁雄 花岡さかえ、早川 悦子、林 洋一、原田 和典
- ◎ 会友推奨 秦 敏信 服部 則子 藤澤 幸枝 松浦 潔 古尾 精一、正来 静枝
- ◎ 会友推奨 原田 楊子 東川三樹男 藤澤 幸枝 松浦 潔 古尾 精一、正来 静枝
- ◎ 会友推奨 増田 敏郎 間瀬 徹 水口 春夫 滿井登美江 三宅 柳子、宮地 越子
- ◎ 会友推奨 村瀬久美子、百崎 恵一、森 恵美子、山口 善久、米田 啓介、若林 洋
- ◎ 会友推奨 山口 繁雄、山口たき子、山口 矩英、山崎 善久、米田 啓介、若林 洋

第17回埼玉一水会の人々展

五月二十四日～三〇日
川口総合文化センターリリア二階
展示ホール



本展は「高田誠先生と埼玉一水会の人びと展」として、浦和伊勢丹アートホールにて中・小品の発表によりスタートし、その後、小川游先生、森敬介代表のご尽力により発展し、今日に至っております。展示内容は秋の一水会展に向けての研究作として、50号と30号の各一点ずつ、今回は五十四名の出品者による総数八十七点の発表でした。

柳田伸郎さん、柴崎近子さん、島崎清海さんがご逝去され、寂しい事ですが遺影と遺作を展示致しました。

初日に開かれた授賞式・懇親会には川口市長をはじめ、



ご支援を賜りました皆様方、県内外の諸先生方、そして高田先生の奥様にご出席をいただき、楽しく和やかな雰囲気の中で進行する事が出来ました。なお、川口市長賞は出浦和雄さん、高田誠奨励賞は山口武行さんが、めでたく受賞されました。

今年も時期を同じくして埼玉画廊で小川游先生の個展が開催され、お陰様で昨年より三百名ほど多い一七〇六名の入場者がありました。会期中は、絵を習い始めた人、親子連れや介護施設の車椅子の皆様が、絵を習い始めた人、親子連れや介護施設の車椅子の皆様が最後まで熱心に

様等、様々な方がお越し下さいました。見覚えのある方とお話したところ、毎年この展覧会を楽しみにしているとのこと、本当に有難く思います。

最終日には寺井力三郎先生、山本耕造先生を中心として作品研究会が行われました。作者から制作についてのコメントの後、一点一点懇切丁寧なアドバイスをいただきましたが、三月に開講された「二水会人物デッサン講座」の様子も交えてデッサンの大切さを語って下さいました。一般の来場者が最後まで熱心に

メモを取っていたのが印象的でした。

新会員と共に来年はよりレベルアップした人々展開催となりますよう、一丸となつて努力してまいる所存でおります。

(浅見文紀記)

第10回記念栃木一水会絵画展 6月19日～25日

八名の創立メンバーで結成された栃木一水会ですが、今年で10回展を迎えました。会場の栃木県総合文化センター・ギャラリーへは会期中、県内外から約一〇〇〇名の入場者がありました。出品者は十七名。第6回展から茨城一水会との交流が始まり、今回も八名の賛助ご出品を頂きました。

展覧会初日には、小川游先生より出品作の御批評とご激励をいただきました。今年は記念誌栃木一水会「十年のあゆみ」を編みました。最終日には展

示作品を前に公開の研究会を実施、レベルアップを指しています。



会員の高齢化や会員数の減少などの課題はあります

が、会員一同新たな十年へ向けて研鑽を積んでいくつもりです。

(渡邊道男記)

第1回千葉一水会展

四月二十七日～五月三日
船橋市民ギャラリー・第四展示室

新緑が色鮮やかな頃、千葉一水会の記念すべき第1回展を開催する運びとなりました。

「写実の一水会」の精神を胸に、具象絵画のあり方について研鑽を積むことを目標として企画された、発足後第1回目の展覧会となります。一水会員、会友並びに、一水会展に出品経験ある者、出品する意思を持ち絵画に情熱と研究心を持った者が集い、「より一層の表現技術の向上と精進を図ること」を目的として開催するに至りました。

初日は午前中に陳列作業を行い、午後一時より開会、三時半よりオープニングパーティーを開催いたしました。平日にもかかわらず、遠くからたくさんの方にお集まり頂いた中、鈴木益躬会長のご挨拶、小川游先生のご祝辞に続き、来賓のご挨拶を頂戴いたしました。千葉一水会事務局長の真木克明さんの発声により乾杯、おおいに親睦を深めました。

展覧会は事務局の迅速かつ

的確な采配と、参加者みんなで力を合わせる和やかな手作りムードの中、充実した七日間でした。期間中一〇〇〇名ほどの方に会場に足を運んで頂くことができました。

のではないかと思っております。今後、より良い千葉一水会とすべく全員で取り組み、会の発展に寄与して参りたいと思っております。

(茅野 吉孝 記)



3会場で同時開催、第2回石川一水会 精鋭展・薫風展・新風展

昨年度、「石川一水会精鋭展」が発足し、続いて薫風展(中堅中心)、新風展(若手中心)も今年二月に発足し、開催いたしました。

今年度三つの展覧会は、それぞれ自主運営で同時開催としました。第2回精鋭展は第76回一水会展で高評価を受け

た会友、一般の中から二十名、同様に薫風展は十九名、新風展は十七名による作品展示です。

会場は

それぞれグリーンアーツギャラリー、ひろた美術ANNEX、ひろた美術画廊で五月二十九日から五月二十八日からの六日間。作品は20号に統一、研究成果が充分に感じられる作品展となりました。メンバーは毎年異動があり、より良い作品作りの場になればと思います。会期最終日には研究座談会を行い、活発な意見交換がなされました。

(三輪 由紀子 記)



緊張と心はずむ1回展!!「一水会北海道出品者展」

四月十四日〜十九日・札幌大丸藤井セントラル・ギャラリー

ようやく雪が消えて野山には花が咲き、身も心も弾む頃、札幌の中心街の歴史ある大丸藤井セントラル・ギャラリーで開かれました。

開催にあたっては佐藤道雄先生を中心に準備が進められ、50号と小品各一点、十六名、総数三十一点が展示されました。「一水会北海道出品者

展」の新たな出発です。

初日には、小川游先生、山本耕造事務局長が早くから駆けつけて下さり、出品者一同緊張の中にも、描いた作品をどのように感じて頂けるのかが期待しながらの講習会でした。

小川先生からは「説明は控え目に」など、山本先生からも具体的なアドバイスをいただき、

すっかり画学生の気分となり有意義な時間となりました。



開会から驚くほどの入場者で、壁の絵が見えないほどでした。芳名帳に記入された方だけでも六一二名をかぞえ、二十年ほど前、多くの道民に具象展として長らく親しまれていた「一水会道作家展」のことが思い出されました。当時は五十人の作家



による100号二枚ずつの展示で、札幌市民ギャラリーで開催されていました。

このたび北海道出品者展を開いて、あのころのファンが長い間この展覧会を待ちわびていたのだと思えました。今後は活動を札幌に集中させるのではなく、北見、旭川、釧路など、開催地域を変えながら回を重ねていきたい。そうすることで広く北海道全域に

一水会の活動を知っていただけでなくできると、佐藤道雄先生は力説します。広いひろい北海道に点在している出品者が一堂に集まることは大変ですが、それでも交流を大切にして、一水会展への出品者やファンが一人でも多くなることを願っています。

(中村哲泰記)



この人に注目 ⑤ 相馬 順子さん

岐阜県各務原市在住で、女性委員では最若手の相馬順子さん。今年、女性としては一水会初めての審査進行係を担当されました。

〈聞き手〉加曾利光男

——一水会はいつから？

46回展からです。大学卒業の年でした。美大ではなく、小学校、幼稚園の先生になるための教育学部でしたが、そこで藤島奨先生の講義を受けたのが一水会に出品するキッカケになりました。

——ずっと藤島先生に？

先生の最初の授業では、自画像を初めはボールペンで、次にそれを貼り絵にして、最後に油彩で描くというものでした。

実物を置いて、如何に肉薄するか！というより、スケッチをもとに画面構成する手法を教わりました。先生には繰り返し「絵にしなさい！」と言われていました。「好きなことをやりなさい！」「自分で考えなさい！」という教え方でした。

——自身のブログで、絵で何を伝えたいのか？ 描く前に言葉にすると書かれていますか？

まず詩を書いて、それを核に作品に作り上げていくのが私のスタイルです。断片的な単語を集めてはイメージを固めていきます。

——具体的には

描き始めは色鉛筆です。それも

大津鎮雄展

「西欧の誘惑・少年時代から辿る画家の生涯」

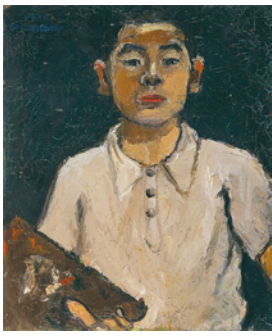
二〇一四年九月二十七日～二〇一五年三月十五日

サトエ記念21世紀美術館（埼玉県加須市）



本会運営委員を務められ
ました大津鎮雄先生の、八十年
近くに及ぶ画業を回顧する大
展覧会が開催されました。

大津先生は一九二〇年、
東京市本郷区千駄木（現・東京
都文京区千駄木）に生まれま
した。早くから画才が認めら
れ、特別免除により十三歳で
日本美術学校（現・日本美術専
門学校）に入学し小島善太郎に
師事、一九三七年には十七歳
にして第1回一水会展に入選



十三歳の自画像
1935年 油彩・キャンバス 60.5×50.3cm

を果たしました。戦時中は中
国戦線に赴き、復員後は安井

曾太郎に師事、以後二〇〇八
年に八十七歳で逝去される
まで一水会と日展を中心に画
業を展開され、二〇〇〇年に
は第15回小山敬三美術賞を受
賞、その翌年には勲四等瑞宝
章を受章されました。

会場には少年時の油彩スケ
ッチ群、第1回一水会展入選
作『遠望』をはじめ、一九五〇
年代の日比谷・丸の内オフィ



遠望
1937年 油彩・キャンバス 91.1×116.3cm

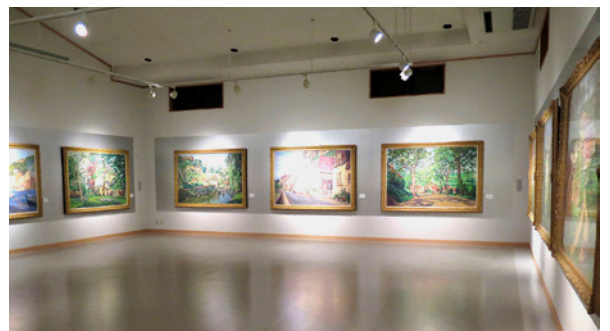
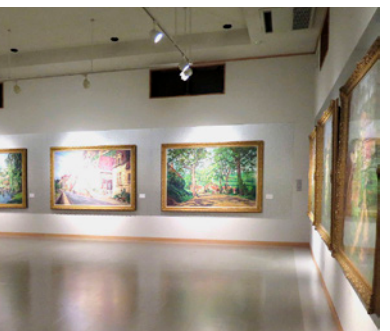
ス街の洋館連作、異国への憧
れがうかがえる横浜・長崎風

景、奈良・外房・伊豆箱根の景
観、そして一九六一年の初渡
欧以来、生涯にわたり描かれ
たヨーロッパの広大な田園風
景と、古城や農家の大作群が
並び、現場での水彩スケッチ
と素描も含めて総数約八十点
ほどが陳列されました。

大胆に繊細に、名指揮者の
タクトさばきにも似た伸びや
かな運筆は、木々のざわめき



城のある町
1973年 油彩・キャンバス 112.3×162.6cm



や風の音をも描き出し、高ら
かに奏でられる色彩のメロデ
ィーに包まれて、来場者は静
かに耳を澄まし画面を見つめ
ていました。（新井隆記）

資料提供・サトエ記念21世紀美術館



山添いの家
1991年 油彩・キャンバス 130.2cm×193.9cm



特別なものではなく、赤青鉛筆と
かです。描きこみはナイフでの描
写が多いです。

——好きな画家は？

古今東西で影響されたとか、特
に好きな画家とかはいません。あ
の人の線は好きとか、色は好きだ
とかはありますけれど。

——動物好きで有名ですが？

犬、猫に限らずイロイロいます。
哺乳類、爬虫類、両生類、鳥類、
有袋類…、最近昆虫も加わりま
した。ペットショップで購入する
ことは殆どないのですが、頼まれ
て増えていきます。

——地元での活動は？

岐阜では日展系の絵画展、中部
での団体によらない女性だけの展
覧会があります。

.....

終始、明快で歯切れ良くお話し
して頂きました。中部一水会や一
水会精鋭展の事務局も担当されて
いて、事務作業もテキパキこなさ
れる印象でした。

自由投稿欄

水路

揮毫 浅見嘉正

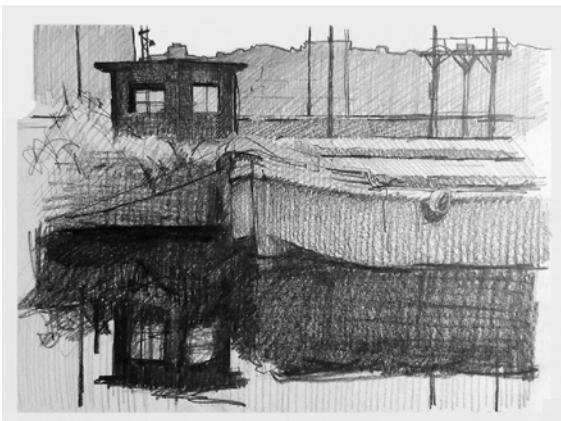
なたぎりとうげ
山刀伐峠

千葉県・真木 克明

私の郷里(山形県)の画家菅野矢一(一九〇八〜一九九二)の晩年の作品で山刀伐峠という小品がある。松尾芭蕉の足跡を辿って三世紀を経た風景を「奥の細道」シリーズとして描いた中の一枚である。

古典を下敷きにして新しい解釈で油絵にするという手法の面白さに思わず快哉を叫んだのであったが、実は本物を見たことはない。

一〇年程前に東京・神保町の古本屋で画伯の個展の図録を見つけたのだ。この図録の前半は色つきであったが後半は白黒の写真であった。山刀伐峠は白黒の写真で、色は想像する他なかった。山賊の出る怖い峠を屈強のものふの案内で通り過ぎた時の芭蕉の興奮を菅野画伯が油絵にしたもので、森の茂みとみられる黒い



加曾利 光男 画

塊が画面の大半を占めている。この黒い塊はきつと濃い緑であるにちがいないと、なぜかその時から思い込んでいまに到っている。それが正しいかどうか白黒つけるために本物を早く見たいと思っ

ているかといえ、実はそうではない。未決着のまま様々な色を想像しながら色に関する強い関心を持ち続けることによって、私の中の緑の表現力を少しでも豊かにすることができないかと思っ

るのである。

大阪府・森本 光英

私の一〇才年上の姉が女学生の頃、その当時流行の挿絵画家・岩田専太郎の画をせつせと模写していました。幼少の私は、それをみて絵をかく事を覚え、家の前の道路に角かくしの振袖姿の花嫁を道いっばいにローセキで描く遊びに夢中でした。通る人にほめられ、絵をかくのが好きな女の子でした。

少女期は、戦争の激化で空襲下を逃げまどいながらも、生き残って終戦をむかえました。戦後は生きるのに精一杯ながらも、何かを学べる時が来て、そんな時、絵を学ぶサークルにさそわれ、それが私の絵をかく出発点となりました。

今や、半世紀以上、楽しさ、生きがいも味わいながら、生涯の仕事として歩んでこられた事に、喜びも感じながら、しかし、画業とは、歩む程むずかしい課題が出てくる事に困惑している昨今です。

私に描かせるものは何か

北海道・中村 哲泰

私は小柄な体形をしている。心のどこかで劣等感が宿っている。そのせいか、高いもの、大きいもの、迫りくるエネルギーに憧れをいだいている。

鋭い山、切り立つ崖壁、再生する力のある大地を四十数年描き続けた。そしていつのまにかエベレストのベースキャンプまでたどりついた。しかし自分の描きた

い感動を見る側へ伝えられないもどかしさ、表現の未熟さを痛感するのである。せいぜい「尖っている」が総じて私の絵への評である。

それでも、北海道の厳しい大地のいなみの魅力は尽きない。近年、高い目線から平地より低い地へと目線を下げ、湿地や痩せ地に自生する野草の生命、エネルギーの神秘に感動し描き続けて数年になる。

幸いにも家から三〇〇mのところには原生林と泉があり、たえず森に確かめに行くことができる。それぞれの姿で芽吹き、花が咲く情景を描写しながらも画面においては単純化や平面構成、そして、抽象性のあるマチエールを融合した絵を描きたいと模索の日々である。

関西美術院を訪ねて!

三重県・田島 健次

「絵画のリアル感、想像力と確かな技術力を身につけて省略や強調、デフォルメなどにより表すべきものなり」という教訓を残していた浅井 忠は五〇才の時(一九〇六年)京都の関西美術院の初代院長に就いていました。

私は昨年(平成二十六年)にここを訪ねてみました。建物(写真)は百年前のままだそう、いまも健全に運営されており、北窓からの彩光や黒光りのする床板に立ち並ぶ石膏像。画架に囲まれて人物画に励んでおられる人たち。私は、珈

琲を飲みながら往時を偲び感慨に耽っていました。

梅原龍三郎や須田国太郎らもここで学び、安井曾太郎はここでデッサンに励んだ後、フランスに渡ったのです。そしてセザンヌを発見し、その構築的な作風に目からウロコの感銘をうけてリアリズムの意味を悟ったと言われています。そして「写真のようにひき写したところの絵には生命がない」と断定していた安井先生は、セザンヌをとおって自分自身に出会ったと言われています。



竹村文男 「早春」二〇一四年

トピックス

竹村文男展

— 予科練はるか —

高知在住の会員、竹村文男さんの回顧展が開かれました。海軍飛行予科練習生に志願し、昭和二十年の終戦は長野県八ヶ岳で国内初のロケット戦闘機搭乗員として迎えました。

●十月三十一日〜十二月二十日
●香美市立美術館
高知県香美市土佐山田町二六二一
プラザ八王子二階

吉崎道治のちよつと道草 ③

色

或る時月光荘の親父に出身地を尋ねられ北海道と答えたら「色が暗いね」と云われた。そういえば師中村琢二から「私は九州の生まれ、君は北海道生まれ、絵は似ていても色が異なる」と云われ、今でも色に対するコンプレックスがある。それならデサニスト(素描家)でと思ったがままならず、困ったものです。

只金が無いだけ！一人しか客はないのに一番奥の部屋。可愛い子供がウロチョロするのでスケッチ帳で絵を教えたら画家と判明して良い玄関先の部屋に替えてくれた。御主人はこんな時期の一人旅で静かな男は自殺志願者と間違えたそう。一人旅は気をつけよう！

山梨県 格好だけは

風体を見て泊めると或る宿の主人から聞いたことがある。甚平にサンダル姿で行ったら断られた。以来、背広を車につんでゆく。因みに断った宿は美術家連盟指定旅館だったのだが……貧相に見えたのかもしれない。

筆

師は柔らかい毛先の筆を使われていた。描き方が似ていると人から云われ、私は豚毛に変わった。師は豚毛も使用されたので、今度は溶き油を使わずに描いて見た。器用だと云われて大作はナイフだけにした。筆で描く小品と一寸も変わらなかった。さて困ったものですね。

北海道 野付半島

朝の八時半に出発、三時帰宅を繰り返す。冬の野付半島は淋しい。部屋で描いた絵を静かに眺め酒も飲まない。



玉虫 良次 画

あのころこれから

田中義昭先生訪問インタビュー

聞き手/新井・さきや・西



いて、色々な人々、高木東六先生やその他の方々とも楽しいひと時を過ごしました。今でも時折思い出しますね。

—水会には自然な形で入られた？

ある時中谷先生から、「そろそろ出品してみては」とお話しがありました。なので50号二点出品しました。それまでに毎週50号一点位持参して指導を受けていましたので、先生も気を遣って下さったのだと思いますね。お蔭様で何とか入選することが出来ました。当時21歳の時でした。作品は横浜の運河を描きました。大変先生にはお世話になり、このことは今も忘れません。作品は何となく先生の影響の強いものでした。

—24回展で一水会賞を受賞。

翌年会員に推挙されました。この時から自分らしい絵を描かなければと悩み続けておりました。僕の気持ちは何となく先生も気付かれて、「これからは独自の仕事をやるべき」と言われました。ひとり途方に暮れておりましたら、「君、そんなに悩んでいるなら一度個展を開いて皆さんの意見を訊くのも良いだろう」とお話しして下さいましたので、文藝春秋画廊で発表することに致しました。

—六十四年から文藝春秋画廊、その後フォルム画廊…。

発表期間中、場所がらでしょうか、沢山の人が覗いて下さいました。一水会の先生方も随分来て下さいました。一水会の方々は、

まだ新人の私の作品をご丁寧にご指導して下さいまして嬉しかったですね。それに他の会の先生方にもご意見などお話し頂きましてとても有意義でした。他の会の人では光風会、藤本東一良先生、金子徳衛先生、時田幸彦さん、その他の先生方では香月泰男先生、大沼映夫先生、彼末宏先生、大歳克衛先生、吉田遠志先生方をはじめ森芳雄先生、佐野繁次郎先生、岡本半三先生方です。今思い出しても大変な先生方でした。四年間毎年個展を開きましたが、文藝春秋の隣の画廊中林画廊の中村鉄さんとその時個展などで知り合いました。佐々亮暎さんと何となく絵の話をしていた折に、中村鉄さんは元国画会の画家でなかなか博識の方で、「君たち学校で学ぶより、絵を勉強するならばプリジストン美術館で毎日名画を鑑賞することですよ、それが一番だね」と。二人で「それもあるかもね」。「それから佐々さんと五十五年ぶりで一緒に川越でグループ展に出品し、久しぶりに当時のことを話題にしてひと時を過ごしました。また、個展開催中ですが時田さんとは色々話し合い、互いの家へ行ったりして深く友人として付き合いました。特にパリの話は楽しかったですね。「俺は数回パリに行っていて先日帰って来たの。以前にも言ったように田中さんも行くとお勉強になると思うね。田中さんの絵にびつたりだよ。色々な美術館もある

—資料をたくさんご用意頂き有難うございます。

私は昭和十二年に鎌倉市で生まれました。ちょうど第一回一水会展が開かれた年ですね。今思いますが、何となく縁がありますね。

—子どもの頃から絵に秀でておられたのですか？

僕も絵を描くのが好きな子供でした。その後戦争が始まりました。千葉県成田市、そして長野県小諸の方に疎開し終戦を迎えました。その後、鶴見(神奈川県)に越して来ました。中学校に入学して美術に関心が強くなりまして、当時美術の先生が日本画家の山本瑛先生で、軍隊帰りの厳しい人でした。よく生徒たちは理由も無い

に殴られてましたね。先生の作品を上野の美術館に搬入させられたりしました。このころから絵の道に進みたいと思いはじめました。高等学校でもやはり美術部で、都の学生美術展等に出品したりしました。その頃、鶴見の駅前にギャラリーがありまして、学校の帰りに毎週見るのが楽しみでした。今思えばこの時から始まったのです。

—師事された先生は？

鶴見に木下孝則先生の研究所があり、主に中谷龍一先生が指導しておられましたので、学校を出てからご指導を受けることに致しました。先生の作品は当時モダンで何か魅力を感じましたので、指導を受けたいと思い先生のお宅に伺

いましたところ、先日パリに出発されたとのこと。残念でしたが奥様が、「せっかくなら来られたのだから、もしよろしければ皆さんと一緒に描きになったら」とお勧め下さいましたので、そこで学んでいました。その当時、武蔵野美大に仲間と入っていました。アルバイトしながらですから体調を崩して半年くらいで美大を辞めました。

—木下先生のアトリエにはどのくらいの頻度で通われましたか？

毎週研究所で色々指導を受けましたね。それと毎月一日には、先生のアトリエで弟子たちが集まりまして楽しい日々を過ごしました。当時の人々は中谷先生をはじめ、菅沼金六先生、安藤軍治先生、泉治彦先生、五味悌四郎先生、今でも親しい藤波成喜さん、パレリーナの小牧正英さん。また、先生のモデルで「メケメケ」を唄っていました歌手の丸山明宏さんもお見えになりましたね。木下先生が若き日に過ごしたパリの想い出、印象派の画家たちが集まりました。色々と楽しい思い出をお話し下さいまして、みんな憧れましたね。暮れには当時芝公園にありました「紅葉館」でダンスパーティーを開

—資料をたくさんご用意頂き有難うございます。

私は昭和十二年に鎌倉市で生まれました。ちょうど第一回一水会展が開かれた年ですね。今思いますが、何となく縁がありますね。

—子どもの頃から絵に秀でておられたのですか？

僕も絵を描くのが好きな子供でした。その後戦争が始まりました。千葉県成田市、そして長野県小諸の方に疎開し終戦を迎えました。その後、鶴見(神奈川県)に越して来ました。中学校に入学して美術に関心が強くなりまして、当時美術の先生が日本画家の山本瑛先生で、軍隊帰りの厳しい人でした。よく生徒たちは理由も無い

に殴られてましたね。先生の作品を上野の美術館に搬入させられたりしました。このころから絵の道に進みたいと思いはじめました。高等学校でもやはり美術部で、都の学生美術展等に出品したりしました。その頃、鶴見の駅前にギャラリーがありまして、学校の帰りに毎週見るのが楽しみでした。今思えばこの時から始まったのです。

—師事された先生は？

鶴見に木下孝則先生の研究所があり、主に中谷龍一先生が指導しておられましたので、学校を出てからご指導を受けることに致しました。先生の作品は当時モダンで何か魅力を感じましたので、指導を受けたいと思い先生のお宅に伺

いましたところ、先日パリに出発されたとのこと。残念でしたが奥様が、「せっかくなら来られたのだから、もしよろしければ皆さんと一緒に描きになったら」とお勧め下さいましたので、そこで学んでいました。その当時、武蔵野美大に仲間と入っていました。アルバイトしながらですから体調を崩して半年くらいで美大を辞めました。

—木下先生のアトリエにはどのくらいの頻度で通われましたか？

毎週研究所で色々指導を受けましたね。それと毎月一日には、先生のアトリエで弟子たちが集まりまして楽しい日々を過ごしました。当時の人々は中谷先生をはじめ、菅沼金六先生、安藤軍治先生、泉治彦先生、五味悌四郎先生、今でも親しい藤波成喜さん、パレリーナの小牧正英さん。また、先生のモデルで「メケメケ」を唄っていました歌手の丸山明宏さんもお見えになりましたね。木下先生が若き日に過ごしたパリの想い出、印象派の画家たちが集まりました。色々と楽しい思い出をお話し下さいまして、みんな憧れましたね。暮れには当時芝公園にありました「紅葉館」でダンスパーティーを開

—資料をたくさんご用意頂き有難うございます。

私は昭和十二年に鎌倉市で生まれました。ちょうど第一回一水会展が開かれた年ですね。今思いますが、何となく縁がありますね。

—子どもの頃から絵に秀でておられたのですか？

僕も絵を描くのが好きな子供でした。その後戦争が始まりました。千葉県成田市、そして長野県小諸の方に疎開し終戦を迎えました。その後、鶴見(神奈川県)に越して来ました。中学校に入学して美術に関心が強くなりまして、当時美術の先生が日本画家の山本瑛先生で、軍隊帰りの厳しい人でした。よく生徒たちは理由も無い



第21回一水会展(1959) カーバイトのある工場風景 F50

小林哲夫先生の話は他の先生からもよく伺います。印象の強い方だったのですか？

私は小林哲夫さんとは中谷先生を通じて、また個人

しね。」「私もそろそろパリ行きが胸の中で動き出した時でした。そんな折、佐野繁二郎先生が、フォルム画廊を紹介して下さいました。六十八年に個展を開くことになりました。フォルム画廊の福島繁太郎ご夫妻は、パリで『フォルム』という美術雑誌を出版されたり、ルオーやドランを育てたことでも知られ、「福島コレクション」としても有名な方ですね。七十二年、パリに行くために銀座の小さな画廊で個展を開きました。その折に小川游先輩が会場に来て下さいまして、色々と一水会のことやこれからの自分たちのことを心配しておりました。「将来はグループ展も」と話し合ったり致しましたね。

情が今日まで続いております。――菱田先生は先にパリに行っておられたのですか？

七月に羽田を出発して、オルシーには菱田さんが出迎えて下さいました。その日は夜でしたので菱田さんのお宅にお世話になりました。菱田さんのお住まいは、パリの一六区高級住宅地でマンシヨンの五階だと思いましたがね。奥様とお子様と三人で暮らしてましたね。その後色々パリ、美術界のことなど教えて下さいました。菱田さんとはそれから二人で絵について「研究会でも」と話し合いました。翌日から安ホテルを探しに、モンパルナスのアカデミージュリアンの近くに宿を決めました。このホテルは何しろ眠れないですよ。古いベッドで人型がついてね。部屋は傾いてワインの瓶もコロコロ転がり参りましたね。四、五日してモンマルトルのホテルに移りました。このホテルには一カ月滞在しました。ここで昔からの友人の西山松夫君と偶然出逢い、互いにビックリしましたね。また、もつと驚いたことには小林哲夫さんも同じホテルとはまたびっくりしました。

的に知っています。モンマルトルの酒場で一杯やりながら全て若い時から現在までの事、作品見ればわかるでしょう？ なかなか絵は達者な方ですね、人間的にも魅力のある不思議な人ですね。生き方も昔の画家のようですね。色々深く知っているけれど、知らない方が良いこともあるですね、人間だもの。また塩見栄一さんからもホテルに電話がありびっくりしましたね。塩見さんとは日本で個展の折に何度も会っていましたので色々話しましたね。偶然一水会の三人が出逢うとは不思議なことですね。後に「通士会」に発展するとは思っていませんでした。

その後モンマルトル界隈で過ごしたわけですね。

モンマルトルで小林さんに会ったり西山君に会ったり、村上肥田夫さんにお会いしましたね。彼はよく私たちのアトリエに来ましたね。小林さんと市立研究所にヌードデッサンに通ったり、忙しい日が続きました。また一カ月程かけてパリの美術館、画廊を回ったりして過ごしました。しかし、モンマルトルに居ると友人知人が来るようになり、本格的に仕事をするために、郊外の街ムードンに移り住みアトリエを借りました。近くにはロダンのアトリエで今は記念館になっていて、数多くの作品があります。また、私の家の裏にスゴンザックの家がありました。スゴンザックはあの辺りを描いてま

すね。日本人では小山敬三先生がムードンの林を描き、佐伯祐三も彫刻家の高田博厚さんも住んでおられ、落ち着いた街ですね。

――当時はどういう人がパリの画壇に？

アンフォルメル運動が流行していましたが画家フォトリエをはじめ、ザオ・ウーキー、デ・クーニング、タピエス、アルプ、ピカソ、ギヤマン、ブラジリエ、ペーコン、私の好きな画家ルイ・ペロー。この作家は第1回青年ビエンナーレ展で受賞した画家です。日本にも来たことがあって、二十メートルぐらいの大作でも凄い迫力、いい絵で心揺さぶられましたね。はらわたグツと握られたような。そういう絵を描きたいなあと思って思ったものです。また、日本人では木村忠太さん、菅井汲さん、田淵安一さん、今井俊満さん、堂本尚郎さん、関口俊吾さん、村山密さん等多くの知名人が活躍しておられました。まだまだ無名に近い人々も住んでおられましたね。

――国立美術学校ではジャック・ヤンケル先生に師事された。

推薦者があれば、新たに教授の研究室に入学できるシステムが創設された。私はサロン・ドートンヌ展等の展覧会出品の折の評論家、ミシェル・マルタン氏の推薦でした。ヤンケル先生の作品は非常に動的で魅力のある作品です。日本でも吉井画廊で個展を開いているので知っている方もおられると



通士会メンバー／左から田中義昭、小川游、小林哲夫、菱田義宣、吉野谷幸重、寺井力三郎、塩見栄一(敬称略)

「フランスでは車で旅行されたと同じです。」

フランスは自由にあちこち回りました。スペイン、ポルトガルは光風会の西山松生君と画商M君と私と家内の四人で、一カ月程かけてスケッチの旅に出掛けましたね。ピカソ美術館、カタロニア美術館、プラド美術館、ベラスケス、ゴヤ、ムリーリョなどの画家に感動しましたね。グレコのトレド、マラガ、風車の街カンポ・デ・クリプターナ地方、セゴビア、ポルトガルなど。私の好きなアンダルシア地方は雄大で魅了されました。マラガからポルトガルに行く街道



第42回 一水会展(1980) 静物 P120

描きを辞めるのも悪くないと二人で笑い合いましたね。先人たちの仕事を思い出すと空しい限りです。パリに帰ってきてまた、オランダ、ベルギー、オーストリアなど回りました。イタリアにも別の年にスケッチに出掛けました。オランダのゴッホ美術館で名画に接して感動致しました。もちろん日本でも拝見しておりましたが、一同に接してその色彩の美しさに惹き付けられました。絵の具が画面にしっかりと定着しているのが尚のことです。それからパリのマルモッタンのモネの美術館です。三階くらいだと思えますが、モネの睡蓮の連作が燃えるような自

にはコルクの樹林が長く続いて、不思議な気持ちで運転した思いがあります。ナザレからセゴビアに行く途中で西山君が野生のわらびを採って、家内に「食べるから茹でて」と言うので食べたのですが、灰汁も抜かないから苦くて食えないやと笑い話で終わりましたが、その後腹の調子は良かったのでひと安心しました。旅の途中で色々な事もありましたが、何かの機会にまたお話ししたいと思います。この旅で古典の作品に触れたことは感動そのもので西山君は「神の描いた作品だ」と只々感心していましたね。我々の作品は何だろう…。絵

由なタッチで描かれており、私は魂を揺さぶられました。オランジュユリーの大作より優れていると今だに思っております。モロー美術館は自宅を美術館として作品が飾られており、名作「サロメ」等多くの作品が数百点以上ありますね。ルオー、マチスなどの美術学校の教授でしたから。滞在中は二つの美術館には何度も行きましたね。先生の絵にモネの影響もあるわけですね。

自分では意識はしてませんが、どなたでもモネの作品には多少なりとも関心があるのではないかと思っていますね。

その後菱田先生、小林先生とのご交流は？

前にお話ししたようにお互いに家族的な付き合いをしておりました。時々会って絵に対する気持ちなど互いに話し合いましたね、小林さんとも。

「逋士会」になるわけですね。

帰国してから数年後、自分たちの中で何となくこれからの一水会について話し合うような気持ちになつてきました。今だから話しますけど、小松崎邦雄さんから話が出たのです。小川さん、寺井力三郎さんに話されて有志に声をかけ、一水会の将来の事などを何度か話し合いました。グループ展を開くことになりましたが、当の本人の小松崎さんが抜けたのにはびっくりしましたね。その後何度も集まってメンバーを決めました。

年齢順で申し上げますと、塩見栄一、菱田義宣、小林哲夫、寺井力三郎、小川游、吉野谷幸重、田中義昭、以上七名。第一回展を一九七八年、文藝春秋画廊で開催致しました。一人三、四点で50号くらいだと思えますね。その時、誰もなしに、我々は一水会の梁山泊だね…。と声が上がりましたことを今でも思い出しますね。のちに七回展まで開催して新たにそれぞれの道に進み始めました。その後三人が鬼籍に入られまして、誠に残念でなりません。思い出しても寂しい限りですね。

「展覧会の反響は？」

我々はそれなりに研究会展でしたので自由に発表して別に気にもせず続けました。何回目の時か、塩見さんの多摩美大の仲間が、作品を見て文句を付けたようでした。その時塩見さんが「じゃあ決闘しよう！」ということになった。奥さんに電話されて、「これから決闘するから車用意しとけ」と話したそうなんです。その後殴りあったかは知りませんが、みんな真剣だったね。私も若かったから見たかったね。それぞれ仲間意識が強かった、今の若い人に伝えたいね。我々の以前にもグループ展がありましたね。メンバーは近岡善次郎さん、広瀬功さん、中谷龍一さん、中川力さん、渡辺祐一郎さん、近藤吾朗さん、黒田外喜夫さん、名取明徳さん、三橋文雄さん、本山唯雄さん、後に吉崎道治さん、皆吉志



郎さん達が出品されておりましたので、逋士会も別に問題は無いと思えますね。

「明日への具象展」、良い展覧会でした。

割と良い展覧会でしたね。この時にどなたが推薦して下さいたのか私は知りませんが、多分同人の人が選んでくださったと思いますね。色々個性を開いていましたからね。

「色々経験された先生の眼からご覧になって今の一水会の良いところ、足りないところを教えてください。」

絵に対する姿勢が正しい、真摯な態度が素晴らしいですね。創立会員の先生方の作品は品格がありますね。日本の美術史に輝いていきます。

「それでは現代はどつてしょう。かつてに比べてもの足りないでしょうか？」

そういうことは絶対にありません。作品が秀でていれば何を表現



「しようが良いと思いますね。二十一世紀の現代、色々な表現があるのも事実です。代表の小川先生が機関紙の中で「写実の定義を大胆に拡大し、たとえ、抽象傾向の作品であっても、真摯な姿勢と表現の真実性が認められるものは、積極的に評価する…」等と発表されておられますので、若い皆様方は良く考えて自由に制作して下さい。明日の一水会のために若い人には頑張ってもらいたいと思います。— それでは先生の制作についてお話し頂きたいと思います。『オイルフレスコ』とは？

キドと同じ樹脂系だと思っています。色の変化も無く必要に応じて使っております。— 先生にとって「具象」と「抽象」というのは一緒で… 私は一緒だと思えますね。「対象物」を描くその表現を深く追求することです。抽象とは、基本原理は色彩や形体を平面化して内なるものを表すことなのではないかと思っています。熱い抽象・冷たい抽象もあります。それぞれクレイとかカンディンスキーらがその代表ですね。— 先生のモチーフは花とか花瓶とありますか？ それはやはり実際に見て？

アトリエの中はその物たちがバラバラに置いてあります。それらを組み立てて制作しています。— ベストセレクション展の時の絵は？

いつも同じ気持ちで描きますが、200号号ですので半分ずつ描いて外で組み合わせましたね。出品作品は静物画ですが、物と物とのせめぎ合い、消失と再生、そういう絵を追及したいと思ひ描きました。

— 次に東京一水会について伺います。この一水会にしたいという希望は？

始まったばかりですから固まっけてないんですよ。やはり自分の作品をしっかり描いてもらいたいですね。玉虫良次さんも研究会に自分の若い時のデッサンを皆様方に見せながら指導してくれました。よそを向かないで下手でも良いか



38歳・パリ

ら一生懸命描いて下さればそれで良いと思います。年齢は関係ありません。東京一水会は本山唯雄先生、玉虫良次さん、上原文丸さん、小沼秀夫さん、女性では西真里子さん、滝沢美恵子さん、また、事務局の廣畑正剛さんには大変ご苦勞願っております。

— これからの一水会についてはどの様にお考えですか？

やはり自分を磨くことではないでしょうか。表面的な絵でなく、いつも作品に疑問を持つて欲しい。疑問があるうちは成長すると思えますね。そういう気持ちを持って前向きに制作して貰いたいと思います。小川代表の「二十一世紀に於ける選択」、あのことを出品者も一回よく読んで勉強して下さい。

— 先生ご自身の今後の抱負は？

そろそろ人生の幕がおり始めましたね。抱負はね…ただ、先人達の作品を思い出すと何か自分が情けない気持ちです。でも私は今も一生懸命やっていますから、それだけが自分に対する救いだと思ひます。

— 長時間に渡るお話、誠に有難うございました。

以上「あのころこれから」二〇一四年十二月十二日NHK文化センター青山教室にて取材

第13回 一水会精鋭展 会期：2016年3月14日(月)～20日(日) 会場：東京銀座画廊・美術館

出品予定作家	青木年広 今城俊雄 河石正義 栗原高光 相馬順子 戸苺武宏 畠山正枝 宮島百合子	浅見文紀 岩池和代 北村春美 児島真澄 高橋よう子 外山順子 服部則子 三輪由紀子	安達久美子 遠藤博政 嘉納希代子 近藤孝子 滝沢美恵子 鳥居佳子 浜崎千尋 森 敬介	新 泰郎 大野 文子 木村 毅 斎藤由美子 田中 敏雄 中沢 嘉文 平井 芳夫 森木 和子	鮎川 功 小笠原あい子 久世 夢二 才村 啓 玉上 佑子 中島 和長 広瀬 範 山口 繁雄	新井 隆 小沼 秀夫 久保 博孝 教 純 芝 啓 辻 齊一 中村 哲泰 保坂 晶 山下 審也	飯塚和秀 海部 洋 久保 慶議 菅沼 正則 辻ノ内恵子 中村 裕二 間瀬 徹 山本 佳子	板倉慶隆 笠井 隆良 久保 直樹 杉田 公子 土田佳代子 中山 一昭 増田 敏郎 李 志宏	市川 広美 加曾利光男 久保多貞夫 鈴木 喜博 寺岡 克三 長坂 千恵 松澤 泉次 弓手 研平	市原はるか 茅野 吉孝 熊谷 弥生 世良ツヤ子 樋谷 邦夫 西 真里子 真鍋 弘子 渡邊 道男
--------	---	--	---	--	--	--	---	--	--	--

第55回 一水会選抜展 会期：2016年3月2日(水)～8日(火) 会場：日本橋三越本店本館6階・美術特選画廊

出品予定作家	小川 游 鈴木 益躬 鈴木 順一 杉森企観明 小沼 秀夫 須貝 昌春 中村 哲泰	川村 親光 寺井 重三 山本 勇 廣畑 正剛 海部 洋 鈴木 喜博 西 真里子	本山 唯雄 さきやあきら 小泉 元生 山田 和夫 勝谷 明男 相馬 順子 藤目 尚江	寺井力三郎 久保田辰男 丹羽 章 平井 利明 河西 昭治 滝沢美恵子 三輪由紀子	吉野谷幸重 武藤 初雄 斉藤 蕙子 山田 正博 茅野 吉孝 竹内 徹 村上 選	吉崎 道治 佐藤 道雄 稲原 吉男 会沢 文朗 久保多貞夫 土田佳代子 森 敬介	田中 義昭 篠原 昭登 山本 耕造 新井 隆 小泉 玲子 戸苺 武宏 山本 佳子	越智 節昇 山名 将夫 池田 清明 伊藤 尚尋 斎藤由美子 外山 順子 弓手 研平	浅見 嘉正 田島 健次 浅見 文紀 宇野のり子 才村 啓 長坂 千恵 芳林 裕子	辰巳 文一 玉虫 良次 一の瀬 洋 岡野 信子 佐竹美笑子 中島 和長 李 志宏
--------	--	---	--	--	---	--	--	---	--	--

一水会事務局だより



内美術村に設けられる同館に十月二十一日、二十二日の両日、小川先生、本企画実現にご尽力を頂いた中札内美術村副館長の飯田郷介氏、埼玉画廊社長岡村睦美氏に同行し、下見に伺いました。

『六花亭』の小田豊社長は、ご多忙な中を自ら空港までお出迎え下さり、作品館予定施設のご案内もして下さいました。道々、社員に親しくお声を掛けられるご様子からは、大企業のトップにおられながらも気さくなお人柄がうかがわれ、活発なメセナ活動は『六花亭』の良き社風の上に築かれていると察せられました。

『小川游作品館』は東京ドームにして六、七個分という広大な柏の原生林の中に準備されており、既存の相原求一朗美術館、小泉淳作美術館に次いで三館目になります。

東北地方の古民家を移築して仕立てた作品館は上質で、程良い広さと落ち着いた雰囲気包まれて、小川先生は長時間熱心に展示方法をイメージされておりました。オープニングツアーへの参加希望者もすでに二〇〇人を超え、来年の四月二十七、二十八日のセレモニーが楽しみです。

(山本耕造記)

会員動静

【死去】 若沢延行(会員)、前田正好(会員)、安部智彦(会友)、齋藤睦男(会友)
 【退会】 佐藤広(会友)、真木恒夫(会友)、後出秀茂(会友)、山口百合子(会友)

日展審査を終えて

一水会からは入選四十一名、うち初入選一〇名。特に喜ばしいのは一瀬洋さんの特選だった。日展2科の入選者数五八七名(入選率二九・八%)から見れば微々たる入選者数といえる。過去の隆々たる時代からすれば、どうした一水会、ということだと思ふ。大先輩からは叱られそう。我々は、大いに外に打って出ることが必要で、それは日展だけでなく、いろいろな機会に積極的に挑戦していかねばならないだろう



し、個展、グループ展等も大いに取り組んでいくことが必要でしょう。かつての様に、洋画壇の中で名譽ある地位を占めるため、お互い切磋琢磨していきましょう。(武藤初雄記)



改組新 第2回日展(2015) 特選 冬の高原 一瀬 洋

会友資格に関する会則の改定をうけて、77回展では一〇八名が会友に推挙されました。その効果でしょうか、今回は例年にも増して状況を呈し、入場者総数は一八、一八九人で前年を一、〇〇〇人程上回りました。また、東京都美術館は「団体利用見直し」を行い、平成二十九年以降五年間の利用方針を定めました。長年の希望が通り、79回展からはロビー階全展示室を使用することになりました。過密な展示は改善されますので、これを機に二層魅力的な展覧会にするよう、共に努めて参りましょう。

『小川游作品館』

下見の1報告

北海道帯広市近郊の中札



作品館 外観

短 信

第3回 四国一水会 出品者油彩画展
 2016年1月5日~11日
 高知県立美術館1F 県民ギャラリー

2016年の展覧会スケジュール

- 第55回選抜展 三月二日~八日 於/日本橋三越 運営委員・常任委員と選抜された委員、会員、会友、一般人選者が出品
- 第13回一水会精鋭展 三月十四日~二〇日 於/銀座メルサ七階 東京銀座画廊・美術館 「第77回一水会展」にて八〇名が選出されました。50号大の作品を展示。
- 盛岡展 三月下旬~四月上旬予定 於/深沢紅子野の花美術館 「第55回選抜展」より、運営委員、常任委員に加え、会場で選抜された作品
- 小川游作品館 四月二十七日前夜祭、二十八日オープン
- 公募団体ベストセレク ション美術2016 五月四日~二十七日 於/東京都美術館

編集後記

機関紙も第五号になりました。準備期間も入れれば約三年間活動しました。ただ、かたか三年ですが、イロイロあった気がします。会の公式記録とは別に、本展に出品された人々約七〇〇人のそれぞれの暮らしや思いがあります。それらを丹念に拾い上げて少しでも紙面に残しておけたらと思います。(M・K)

代表の小川游先生の作品を常設する美術館ができる。絵は描かれた環境で鑑賞するのが一番良いと感じている。例えばアトリエで生まれた絵はアトリエで見るのがいい。二〇年に涉り北海道に足を運び取材され、その地の風土を取り込み尽くした先生の作品は、北の大地におかれるのがいい。(A・S)